

# 現代日本における子育て規範の変容と母親たちの困難

Changes of parenting norms and difficulties for mothers in contemporary Japan

仁科 薫  
Kaori Nishina

大妻女子大学人間生活文化研究所  
Institute of Human Culture Studies, Otsuma Women's University

キーワード：子育て，ネットワーク，育児書  
Key words : Parenting, Network, Books on childcare

## 1. 研究目的

今日の日本では、母親の孤立は解消すべき社会的課題として論じられている。そして、育児をする母親を支援する社会的ネットワークの重要性が論じられている。こうした視点から行われた重要な先行研究の例としては、松田茂樹による『何が育児を支えるのか 中庸なネットワークの強さ』（勁草書房，2008年）を挙げることができる。本書の中で、松田は、今日、育児期の家族を支える世帯外ネットワークを築くことができるか否かは、社会階層や居住地域など、社会的に決まっている部分が多いことを指摘し、親たちが相互に接するさまざまなきっかけや場を増やすことの必要性を論じている。

育児期の家族にとっての社会的ネットワークの必要性は、時に、母親への要請として論じられることがある。例えば、教育心理学者である杉原一昭は、友達のいない子どもの母親にも友達がいないことが多いため、子どもに友達を作るには母親が友達をつくれれば良い、と指摘している（1999年2月26日，日本経済新聞夕刊，6頁）。

当事者である母親たちにとっても、良好な人間関係のネットワークを形成・維持することは重要な課題として認識されている。その表れの一つが、『ママ友おつきあいマナードリル』（西東桂子，主婦の友社，2014年）のような、母親に他の母親たちと関わる際のマナーを指南する書籍の存在である。その一方で、人間関係のネットワークが母親たちに与えるストレスについて、多くの母親たちが指摘し、メディアでもとりあげられている。その表れの一つが、『助けて！ ママ友地獄…』（大手小町編集部編，廣済堂出版，2019年）のよ

うな、母親同士の間で勃発したトラブルに関する体験談集である。

本研究は、上記の状況を踏まえ、母親たちが子育てというケアを遂行するにあたり参照するメディアにおいて、母親を取り巻く社会的ネットワークはいかなるものとして捉えられてきたのか明らかにしようとするものである。当事者である母親たちが支持してきたメディアにおける社会的ネットワークの描写から、良好な人間関係のネットワークの形成・維持を必要とし求める、あるいは社会の側から要請されることもある母親たちが、いかにストレスを感じずにそれを遂行しうるのか、示唆を得たいと考えている。

## 2. 研究実施内容

母親たちが支持し、参照してきたメディアの例として、本研究では育児書を取りあげる。本研究ではまず、特に育児に関する著作数の多い書き手に着目し、資料の収集を行った。収集した育児書の中から、母親を取り巻く社会的ネットワークに関連する箇所を抽出し、その内容から概念を生成した。その上で、概念間の関係性について検討を行った。本年度は、特に松田道雄による育児書、『私は赤ちゃん』（岩波新書，1960年）、『私は二歳』（岩波書店，1961年）の分析を重点的に行った。その理由は、以下の二点にある。第一に、『私は赤ちゃん』、『私は二歳』は、松田の代表作である『育児の百科』（岩波書店，1967年）とともに、1960年代に発売され今日に至るまで版を重ねられるベストセラー、ロングセラーとなっているなど、影響力が大きい書籍である点が挙げられる。第二に、『私は赤ちゃん』、『私は二歳』は、赤ちゃんの

視点、あるいは二歳児の視点で書かれたものであり、そうした特徴から、登場人物として、母親を取り巻く社会的ネットワークの構成員が多数出てくる点が挙げられる。『私は赤ちゃん』、『私は二歳』の登場人物は、現実に存在する人物ではないが、母親たちによる支持の大きさから、そこに描かれた社会的ネットワークは1960年前後の子育ての状況に照らして一定のリアリティを有していたと考えることができる。『私は赤ちゃん』、『私は二歳』で松田が描いた母親を取り巻く社会的ネットワークは、本研究による分析結果では、下記の特性を有している。

### 3. 分析結果

#### 3-1. 近隣住民との密な関係

『私は赤ちゃん』、『私は二歳』において、主人公である子どもの母親は、近隣住民からなる、豊かな社会的ネットワークを有している。「隣の奥さん」や「アツシ君のお母さん」をはじめとする主婦・母親仲間のネットワークの他に、「野菜を売りにくる畑のおばさん」や姉や従姉妹といった親類がやって来て、話し相手になっている。主人公の一家は、『私は二歳』の中で京都へと引っ越すのであるが、「ママは京都へきてまだ日がたたないからお友だちがいない」という描写に見られるように、転居直後は地域住民のネットワークが乏しかったことが分かる。

#### 3-2. 人間関係を媒介する物や場の存在

上記のような、豊かな社会的ネットワークを可能にする条件の一つに、人間関係を媒介する多くの物や場が存在することが指摘できる。主人公である子どもの母親は、日々の生活に利用する物を、近隣住民との関わりの中で入手している。例えば、主人公一家が住んでいる団地には、「野菜を売りにくる畑のおばさん」がやって来て、野菜の売買が行われている。また、主人公の母親の服をつくるために、「洋裁やさん」をしている「カズちゃんところ」へと出かけている。さらに、主人公の母親は、近隣の主婦と物の貸し借りをしている様子も見られる。それは、「中華料理の作り方」というレシピ本や、「毛糸の機械編みの道具」といった物である。京都に転居後、主人公が母親とともに通うことになるのが銭湯である。この銭湯で、主人公と母親は、同じく銭湯に通う女性たちから様々な情報を得ることになる。

#### 3-3. ロコミの両義性

『私は赤ちゃん』、『私は二歳』において、主人公の母親の社会的ネットワークの中でやりとりされる「物」の中でも、最も重要なのがロコミにより得られる情報である。主人公である子どもの母親は、ロコミにより有益な情報を入手する機会に恵まれている。例えば、子どもがベッドから落ち頭をうった際、母親が「アツシ君のお母さん」の助言により安心する描写がある。その反面、ロコミによる情報が不正確な場合や、不安にさせられるものであることも多い。例えば、子どもが実際には「自家中毒」であったのに、「隣の奥さん」に「エキリかもしれない」と言われ、母親が青ざめる描写がある。主人公の母親にとって、ロコミにより得られる情報は両義的なものであると言える。

#### 3-4. 例外的な事態としての親子の孤立

『私は赤ちゃん』、『私は二歳』では、母子の孤立が主要なテーマとして論じられることはほとんどない。そうした中で、深刻な事態として描かれているのが、母子が家出をし、「飛び込み寸前」にまで追い込まれた事件である。この母親は、元々は「とてもほがらか」であったのに、脳性小児マヒの子どもとのことで困難を感じ、人を避けるようになったとされている。主人公の母親は、脳性小児マヒの子どもを育てる家族への国家による支援の必要性を夫との会話の中で語り、この項は終わっている。母親の孤立が、母親の元々の性格との関連でクローズアップされず、脳性小児マヒの子どもを育てる家族への支援の乏しさと結びつけられている点が注目される。

### 4. まとめと今後の課題

育児期の母親が、孤立状態になり得るということは、今日多くの論者に共有されている前提である。1. 研究目的で引用した杉原による指摘も、この前提にたったものと言えるだろう。子どもの発達の観点から、母親に社会的ネットワークの形成を促す議論は、一定の説得力を有している。一方で、NHK スペシャル取材班による『ママたちが非常事態！？』（ポプラ社、2016年）で執筆者の一人である小林欧子自身の経験として描かれているように、母親たちが主体的に母親仲間、いわゆるママ友を作ろうとして挫折し、落ち込む場合があることも事実である。

本研究で分析対象とした松田による育児書は、

今日と比較すると、母親が孤立しうるということが強調されていないが、それはなぜなのだろうか。『私は赤ちゃん』『私は二歳』で描かれる主婦・母親仲間のネットワークでは、母親の主体的な意思も大きな役割を果たしているように読み取れる。しかしながら、母親仲間を作ろうという母親の意思だけではなく、物や場のありようといったものも、孤立の防止に一定の役割を果たしているように読み取れるのである。

例えば、「野菜を売りにくる畑のおばさん」や銭湯に集う人々とのコミュニケーションは、仲間作りを主要な目的とはしない場で発生している。主要な目的は、野菜の売買や、身体を清潔に保つことである。1960年前後と今日を比較すると、仲間作りを主要な目的とはしないが、育児をめぐる会話・対話に開かれた場に行く機会が、今日の母親の方がより少ないのかもしれない。

母親の孤立の回避を論じる際、母親の主体性に期待し、ネットワークの形成を要請する議論には、母親が挫折した場合の心理的負担というリスクが存在する。これに対して、仲間作りを主要な目的

とはしないが、コミュニケーションに開かれた場が多数存在するならば、そうしたリスクを伴わずに、孤立の回避をなしうるのではないだろうか。しかし、減少傾向にある一般公衆浴場数を大幅に増やすことや、雑談に応じてくれる野菜の行商人を増やすことは、現実的な提案とは言えないだろう。今後は、新聞記事等のメディアを活用し、1960年前後と今日の違いについて、さらに緻密な検証を行いたい。さらに、松田による育児書と、他の論者による育児書の比較も行いながら、今日の状況に即した、母親の心理的負担を軽減しうるようなネットワークのありようについて探求したい。

## 5. この助成による発表論文等

今年度は論文等の公表には至らなかったが、今年度に行った分析をふまえて、次年度は成果の公表を行う予定である。

## 付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成（R1901）を受けたものです。